



聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「楽しくみんなと『まちづくり』」

ちだ せつこ 1944年(昭和19年)
栃木県足利市生まれ
南葛西在住
千田 節子



■まるで事務所

「ガサガサして落ち着けないなあ。いったい何やってんだ」って主人が困るほど、我が家はすっかり事務所になってしまったんです。人が出入りする音や始終鳴る電話、食卓には書類の山がで、壁はメモだらけでしたね。

昭和48年、わたしたちは2歳の長男と埼玉県の巨大な北坂戸^{きたさかど}団地で暮らしていました。時代は第2次ピーブーム、新しい団地には当時29歳のわたしと同世代の若い元気なお母さんたちがいっぱいでした。

自治会もやりやすい雰囲気があって、すぐ文化部に入ってね。いろんな催しや文庫活動の手伝いなどを、団地の子どもやお母さんたちと一緒に体験していったの。子育てってこんなに楽しいのだからってことも覚えたんですよ。みんな連帯感があったのよね。

「まちはどうやって生まれるんだろう」という好奇心があったんです。ただ箱物ができただけじゃ「まち」にはならない。そこに人が住むようになって、最初は子どもたちがワーッと出て来る。その後お母さんたちも出て来て、お母さん同士が「どこそこの野菜安いわよ」なんて会話するようになる。そういう関わりができて「まち」になるんだなっていうのを、この団地で見てきたの。

ここで生まれた娘が4歳になった昭和54年、主人の転勤のため南葛西のなぎさニュータウンへ引っ越すことになり、「もうおとなしく暮らす」と決めていました。

■動き出した博多人形

昭和19年、8人きょうだいの5番目、3女としてわたしは栃木県足利市に生まれました。読書や作文や歌うことが大好き、活発じゃなく体操が嫌いで体も弱い、家にこもっていたかったですね。真ん丸い顔でいつもニコニコ、じっと座っているだけなので、「博多人形みたいね」って近所の人たちから言われてたの。教師だった父は戦後よく映画館に連れて行ってくれたり、物語を読み聞かせてくれたり、唱歌も歌ってくれたんですよ。

父の書棚の文学も片っ端から読んだし、隣の家では雑誌の「明星」なども読んだの。美空ひばりとかの流行歌も

好きだったんだけど、父が厳しかったので、家では唱歌だけ歌ってました。

わたしが急にガリガリ働くようになったのは、小学5年生の時。当時39歳の父が病気で片足の切断手術をし、亡くなるまでの18年間寝たきりの状態になってね。仕事が忙しくなった母の代りに、わたしが家事をやんなくちゃって。ご飯作りや父の身の回りのことも、やるようになったの。

そのころ、中学1年の兄とわたしで、養鶏をやってみました。ひよこは姉が買ってきてくれて。ピーピー鳴くひよこをミカン箱に入れ電球で温め、ニワトリに育ててね。兄がトタンや板で鳥小屋をどうにか作ったんだけど、台風が来るとニワトリがズブ濡れになっちゃってね。ひよこはどんどん買い足して、多い時は100羽いたかしら。産まれた卵は町のケーキ屋さんが、いつも買いに来てくれたの。

餌の買い出しはわたしの役目だったけど、たまに面倒になってね。その辺に転がってたカボチャを食べさせたら、カロチンで黄身の色が濃くなっちゃったの。そしたらケーキ屋さんに「これじゃあダメだ」って返されてしまったね。研究したわよ。良い卵にするために、餌に葉々や貝殻も加えてみたりして。3年ほど続けたかしら。生計の中心にはならないけど、家の役に立つことがやりたかったの。我ながらたくましくなったと思ったのは、この時かな。それまではほら、博多人形だったんですから。

あのころ、寝たきりになった父は、兄が鳥小屋を建てる時には指示を飛ばし、家計簿を付け、近所の子どもたちを床の周りに集めてそろばん塾を開くほど、元気だったんですよ。8人の子どもの抱え八方塞^{はっぽうふさがり}だったはずの母が、晩年に「苦^う勞なんて覚えていない」と言ってたけど、わたしも楽しいことや嬉しいことの方が、多かったなあ。姉たちがパイト先でもらったお菓子を、小さく切ってみんなで分け合って食べたのを思い出すの。それに近所の人がよく声をかけてくれたことは、何よりもわたしの元気の素^{もと}でしたね。

■なぎさの大波小波

しまった、と思ったのはこの地域に図書館が無いと聞き、「始めようよ」と言っちゃった後でした。約1,300世帯が暮らすなぎさニュータウンへ越して間もなく、おとなしく暮らす

という決意は消え、我が家はまたゴチャゴチャの事務所に戻ってしまったの。

翌昭和55年、子どものためにお母さんたちと、「なぎさ文庫」を立ち上げたんです。土日だけ団地の一角で、葛西図書館から1万冊以上の本を借りての貸出しや読み聞かせ、絵本作りや人形劇団の公演などもやるようになっていったのよね。また、古本市を開いて得たお金で、なぎさホールに日フィルの四重奏を招いたことは、文化活動への先がけとなりました。

当時、区内には図書館が5つしかなかったの。わたしたちは、近隣への図書館設置も、区にお願いし始めました。しばらくして西葛西図書館が平成5年にできたんですけど、まだ遠かったのでもっと近くに作ってほしいと、さらに陳情したんです。



◆「櫻の会」で読み語りする千田さん

書くことが好きなわたしは、活動のかたわら児童文学学校で勉強し、40歳の時に「葉の花団地つむじ風」という児童書を、講談社から発行しました。これは、北坂戸団地時代の自治会活動や子どもたちとの交流など、「まちづくり」を描いてみたの。

また、『風と共に去りぬ』の気丈な主人公の拠り所が長期までタラという大地であったように、わたしの拠り所は詩作なんです。『無辺の祭りの青いひなげし』という詩集は、44歳で乳癌を患った時から10年間のわたしの軌跡で、書き溜めた詩をまとめ、自費出版したものなの。

なぎさの管理組合事務局に勤め始めた年に、癌になってしまったんだけど、幸い初期だったの。手術後もすぐに帰れて「ああ働けるんだ」って思ったわ。ここに17年間働けたの。管理業務以外にもいろんなボランティアや集りがあって、緑育会、防災会、歌声喫茶に携わっていくきっかけとなったんです。

理事や自治会の役員って、家ごとに順番でまわってきますよね。中には本当に嫌がる人もいたの。ふだん会社と自宅を行き来している男性たちは、近所付き合いに慣れていないのか、けんか腰の話し合いになるんですよ。「初めは愛鬱だと思っんですけどね」と言って、会議も毎回できるだけ面白くやるように心がけたの。会議の後にビールを1杯出すと、みなさん鎧を脱いで和やかにしゃべり始めるのよ。

1年経ったころには、「縦も横も人の繋がりができて良かった」って。そういう人たちをいろんな会に、どんどん誘っちゃうの。すると「最初は何だったっけ。何であんたを知ってるの」って言うぐらい、長く付き合える関係になったりするのよね。

なぎさ防災会は、平成7年の阪神淡路大震災を機に翌年発足しました。会長は「楽しくやらなきゃ、こんなことやってられない」と言うし、わたしも訓練とか嫌だなと思っていたんですよ。実際活動してみたら、防災っていうのは、災害時に人が助け合うことが大事だと分かったんです。ふだんから近所の人と言葉を交わしたり、気遣ったりする「まちづくり」っていうことなんですね。

平成17年に管理組合を辞めるとすぐ、江戸川総合人生大学「江戸川まちづくり学科」に入ったんです。在学中に「葛西まち文化研究会」を結成し、地域のホールでクラシックコンサートなどを催す活動を、今も続けています。

子どもたちへ絵本の読み聞かせを始めたのも平成17年、願いが叶って東葛西図書館が開館した時からです。「子どもの読書活動の実践」で平成21年に文部科学大臣賞をいただいたのは、まちのお役に立てたということなのでしょう。

平成20年からわたしは、「東京湾岸集合住宅ほうさいネットワーク」に、防災活動の軸を移しています。居住者とのコミュニケーションを深めていくために、防災だけでなく福祉・健康・文化など広いテーマで、皆さんと楽しめるフォーラムやセミナーを開催しています。

今考えていることは、自分の住んでいるまちで気の合った人たちとの「暮らし合い」です。この先1人暮らしのお年寄りが増えてきますよね。なぎさに空き室が出たら、お年寄りが5〜6人で一緒に部屋を借りて、食事や維持費や役割などを分担して、家族のように暮らすってどうかしら。

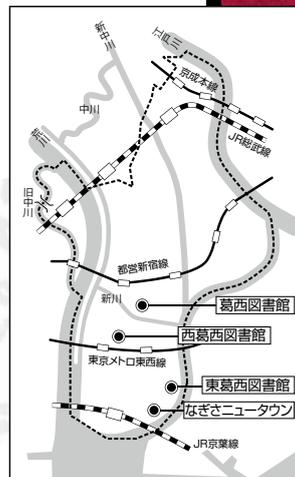
わたしの楽しみ

「櫻の会」は、友人と2人で始めた読み語りの会です。みなさんに、ちょっとワインを飲んでいただいてね。わたしは藤沢周平の分かりやすい短編を読むの。なぎさホールの隅々まで届くように、声を張って朗読するの。小さいころから声を出して読むのが好き。楽しみでやっているのだから、これはわたしの道楽ですね。

なぎさの歌声喫茶「ぼっは亭」は、60人を超える参加者で大盛況なのよ。アコーディオンを弾いてくれる人がいてね。わたしは歌の背景を朗読したり、一緒に歌ったりしています。唱歌は、聞いているだけでも心を癒すんですよ。

緑育会はもう28年になるわね。花作りも小さい時から好きなのよ。よその庭の草取りもしたいほどだから、雨の日の作業も苦痛じゃない。作業後、みなさんとの懇親会も楽しみのひとつなの。

楽しいことをタコ足配線のようにやりますけど、出会った多くの仲間が手伝ってくれる。みんなの力があるからできるんだよね。「まちづくり」に関わるって、大事だと思っんですよ。



- ◆ インタビュー／2012年9月
- ◆ 聞き手／小池智恵子 岡西和子
- ◆ コーディネーター／磯谷真理子 樋口政則 小野塚和江